

## 日体大ボクシング部・浅村監督に聞く／BOX

2016.5.20 14:10

関東大学ボクシング2部リーグに所属する日体大。名門体育大学として、スポーツ各分野で活躍するアスリート、指導者、研究者OB・OGが多い。5月14日に開幕した第69回関東大学ボクシングリーグ戦1週目では、慶大を相手に5対2で勝利した。その日体大ボクシング部を指揮する浅村雅則監督から話を聞いた。(岩崎仁)

### ——初戦を終えて、チームの状況は

浅村監督「慶大戦を5対2で勝ったものの、納得していない。今季1部リーグ昇格を目指すチームとしてはまだまだ未完成だ。今後更に追い込み、完成度を高めていきたい。部員数が多いため、チーム内の競争も激しい。リーグ戦に出場できる人数が限られているので、他大学に勝つ前にチーム内の競争に勝たなければいけない。「自分が出場する!」と競争意識があり、とても良い相乗効果が生まれている」

### ——普段の練習や日常生活は

「土日の午前は、中距離走、インターバル走などを含み2時間程度走る。午後はジムワークの2部構成。平日はジムワークの前に1時間程のロードワーク。ジムワークのメニューは日によって変えている。練習前、準備体操後に体幹トレーニングを取り入れている。体幹が鍛えられ、強いパンチを打てる選手が増えてきた。水分補給を選手個人で工夫している。例えば練習前にアイトニック飲料、練習中はハイポニック飲料を飲み分けることで、きつい練習にも耐えられるようにコントロールしている。部員は学生寮に入っている選手と、一人暮らしをしている選手がいる。1年生の多くは150人以上が暮らす学生寮に入り、集団生活を経験する。学生寮には剣道部、柔道部、空手部、少林寺拳法部を始め様々な部員と一緒に。私の経験上、他競技の選手たちと交流がいずれ財産になるので、日体大に入ったからには多くのアスリートと交流してほしい」

### ——高校生のスカウトについて

「全国大会、各地区のブロック大会を視察し、選手の勧誘を行っている。また、日体大は全国各地に体育教師などの指導者がいるため、そのネットワークから選手の紹介をされることも少なくない。5、6年前から、地域貢献事業として毎週日曜日にボクシング教室を行い、ジュニアの育成をしている」

### ——学生時代にボクシングに取り組む学生に対して

「ゴングが鳴ると、憎くもない相手と殴り合い、試合が終了すればお互いを称え合う。逆に殴らないと失礼にあたる。こんな競技は他になく、だからこそ苦楽を共にしたチームのメンバーとは深い絆で結ばれ、拳を交わした相手とは友情が芽生える。大学時代にボクシングを経験することで、人を思いやれる人間になり、そこで得る、礼儀、忍耐力、協調性は社会という大舞台できっと役立つ。卒業後、日体大で4年間ボクシングに打ち込んだことは人生の糧になるので頑張してほしい。また、指導者となり、沢山の選手を輩出してほしい」

### ——監督にとっての関東大学ボクシングリーグ戦とは

「監督を務めてからというもの、すべての試合が印象深い。中でも一番印象深いのは、日体大が1部リーグに在籍していた頃の2011年だ。第64回リーグ戦で、当時主将の出端雅光が階級賞を取ったことが忘れられない。1部校としてまだまだ未熟だったが、日体大ボクサーとして初めて階級賞を取ってくれたことが思い出に残っている。思い返せば人生の半分以上をボクシングに捧げてきた。私にとって、ボクシングは人生そのもの。指導者になったばかりの頃は「日体大のた

めに」と思い指導してきたが、今は「日本ボクシング界のために」という思いが強い。世界大会に行き、世界トップ選手たちの良いところを持ち帰り、指導に活かしたい。私を育ててくれた日体大、ボクシング界に恩返しすることが使命だと思っている」


## 日本体育大学ボクシング部

1972年創部。女子選手で全日本選手権7連覇の箕輪綾子はOG。卒業生は体育教員となり全国各地のボクシング部顧問として活躍、高校チャンピオンを多数育成。

## 浅村雅則監督

1965年6月17日。東京都出身。沼津学園(現・飛龍高校)出身。大学卒業後から日体大の監督として指導開始。選手時代を含め、30年以上ボクシングに携わる。AIBA国際3スターコーチ。女子国際大会日本代表コーチ。

---

 Copyright (C) 2016 SANKEI DIGITAL INC. All rights reserved.